



訓  
語  
句  
選

附  
録

下

中村俊定文庫  
文庫 18  
230  
2







了然のみ能因法一ニ跡亦  
 長能ハ新奇を以て成るべし  
 法外に在るは亦法外に在る  
 内なるに在るは亦内なるに在る  
 心ありのみ法ありて心ありても見  
 ちるのかち法ありて心ありても見  
 きぬふたりの心ありて心ありても見  
 凡格何身ありて心ありても見  
 中法ありて心ありても見





わのくゑるしよ乃を肩つて  
ふも申しゆれしこのやこほ  
士と打らつゝ物ふきも  
れと申しりやれとたし  
いもつたし  
中矢中しりやれとたし  
聊の縁音おはすくすいた  
えしおらもしやもも  
ひくもるあしやれし  
九つん

と末に終つてまゝにうりなまや

はるのち期

みれしはるものほのちやあも  
たしくしひよをたす  
しよんちやのちや  
ともあまのちやあも  
九つん

不病のま



青流洞三幽祇室居士肖像



建小祠于富岡

謚

祇敬靈神

大いに祇敬なりて

遠くともろもいそいそ河河かたよりりそあるそ  
年舟をわくそもつやろろ吾さいついの所祇室  
有土ハ後區名山を遊歴して生涯旅を栖よ  
わつりるそし舟舟をさつる湯むけのそ  
ししてさかのり給ふそ給かりはろろそ墓をうて  
のあらわいてそ舟ぬ給もさつら給事のみそ  
此秋ハ舟中五日雨そりある曉はそ舟のすもそ  
古も物りらよそ人への命ハ雨のそ舟もあつもの  
のりもそ舟も愛持坊のそ



ひの舟よりとりの舟にすゝし河の傍にありかみど  
河の舟よりよの舟漕いでい芝浦よりいり船をふく  
こちこちありて有舟もありやちしやとまよふり能  
おほつるあゝおほつるあゝ

若かりんぬ人のすゞるやまの海

人こね佳句いとくは日詠り佳句の予り  
草も福めなむらし佳句大なるけとらあはれり  
毎夜あつりてお川の驛を過れりしはれ十日  
あまの降はくまのるる雨雲はくはれかぞや  
いとくはれり河もやうとむらしとくはれり

ついでに日詠やいふもいふもいふも  
予こねあつちしとくはれ客の筆を思ふ  
わが人こねまらむとくはれりしはれり  
おまみしとくはれり馬をこらとくはれり  
日たのくはれり家を辞して舟をこねる  
あつちの舟り人こねるいふとくはれり  
よの舟り人こねるいふとくはれり  
この舟本國十二天とくはれり  
名舟や十二天とくはれり  
真まの舟り葉とくはれり



月見のふゆい〜つ〜  
旅亭〜むとも

十六日晴もやう兵旅よふ日也  
武藏の國をさつてふのみにくあいの  
るはるはあやしきをとんよとて是れ猿名塚

つふよ〜つら〜り  
な〜め〜  
ろれあらは待集来りやとる

十七日れ朝大山り詣てなを〜  
何名刹の山を  
り廻つてけれえかろり〜  
なを〜のりゆ〜

〜  
わ〜つがの〜  
路〜為れ目りあらはぬり  
そむれ舞

重料親善堂りやよ〜  
ひ各〜とみり  
ね白〜  
ひ〜堂中〜  
ねり〜  
〜  
〜

次の日さこのみ川を〜  
か田奈れ宿を〜  
長興山つ〜  
ゆる〜  
心潭川〜  
白象普賢を〜  
石面〜  
名







硯をとりついで墨水をひきりて控るまへ一句を  
あつげ侍る

夕の夜や暮きりすづりて道の事

夜難く夜半つづらきつゝあはれに短冊  
二枚お風

少一のりりて宗祇は何の古墳あり是  
素としく流りて苔うつみく文をよこし  
ちり石はこもほまじしやうし

詠世も余あは吹し秋の風

うねりり石霜着つあつこ入りりりりり

かみりーあつとり顔りり心この板戸おやり  
筆をあらうしーしあめやうりりりりり  
此庵もーあふ昔流洞やあつこりりり  
庭上りりり石をひておの流りり石霜け  
二子をいりりり名と定あつれりり眺望いん  
うねりり九葉吾をまつなれりり何りりりり  
数寄りりみりりりりりりりりりりりり  
ちりりりりりりりりりりりりりりりりり  
いりりりりりりりりりりりりりりりりり  
をりりりりりりりりりりりりりりりりり



中より舟廻船ハ常よりちあはし〜  
り〜  
此の所 舟のあつ〜  
ちも〜  
のちちり〜  
を〜  
ぬお相乃いりりなる〜

後古人のあ〜  
は〜  
〜  
〜

〜  
〜  
〜

享保十八年 申秋

み光洞

祇徳稿



高祖法師像



晉王右軍性愛鷲為山陰道士字  
經換鵝士得書為珍也仲水先士  
素好古且耽風騷以故為程玉法師  
所書一軸寶秘珍謂有餘與依所  
好以得之於是先士筆諸名豪傑新  
鮮瓊瑤之句而為冊款陳惠之謝表予  
亦有金襴漆膠之交漫綴一絕聲管  
以供胡盧云



自然齋主風騷客手澤傳來二百  
霜洒落吟懷今尚古炎天梅葉ぬ  
誰香

園照義收稿



月夜に照る字根の宗祇

古自筆の題其吾友受定井曾夕匱  
抄にありて其しと書きたりり其若然乃  
つゝあつてやあつてりりよて人の句を  
とらひて其しと書きたりり中書きたりり此選の  
後一とて其しと書きたりり其しと書きたりり  
のしと書きたりりみそり其しと書きたりり  
下と書きたりり武苑園すもに河ちの  
あつてりり其しと書きたりり其しと書きたりり  
のしと書きたりり其しと書きたりり其しと書きたりり  
をいれりり其しと書きたりり其しと書きたりり



志きりよあつてくさるる也

短策閑之詠

吟き終るるあし月夜を相が水光  
俯して下流一涸の澤を鳥那  
藤の露の松の枝に結ぶぬけて空翠  
去るくもふれ雨野也魚貫  
美の代やちき流ふ流し一子者蒹葭  
くくくけもぬく口上をり執筆

下略

去席よゆりて祇夜の筆を  
吟夢も終るく自れ句也は朝の  
照流く連流るる壁の文いとく  
くくくくくくくくく

手くりよよあつてくさるる也  
空してくさるる也  
岑水

手くりよよあつてくさるる也  
祇夜り終るのそ途をくさるる也  
曾夕  
中をくさるる也

蕨すも虫ら舞半り飛つてあ  
曉雨



あはれ人れもさう祭海有る  
多し〜しき〜物と道〜れ  
しを祝し〜し〜り〜り  
言根は月宗祇の事か舎り外  
はれた持るま〜と押し〜り  
まよふ事か世の事か  
おれ〜

烏邦

祭まふ〜風の事か昔か〜ら西  
知〜いあまのぬ〜事か事  
ひ〜さ〜ら〜何〜の事か

茨難

宗祇のてつ〜ら〜り〜り  
得〜り〜と〜事か事  
辨〜事か事〜事か物の事  
家〜事か事〜事か事  
と〜事か事〜事か事  
を〜事か事〜事か事  
そ〜事か事〜事か事  
も〜事か事〜事か事  
〜

あや〜事か事〜月の信〜不  
魚貫



仲氏ゆきりつゝハ佛子能を加め  
那の友より二十年未意つゝ  
あゝこの道を好まざらん  
よりつやとらゝ一紙のまゝ讀を  
たとの二百年おれ有はつゝ  
あやうけくおらむ向くを  
とあつゝ

うらやまゝをらむ月夜花の上

空翠

○題 宗祇

宗祇のまゝ蹟をそゝる

しつゝつゝまゝ向よち好くして

作りなす

煉言一紙より志すは香極岩

芳室

大坂

月や桂をおつゝ人の妙句は

月やうほらをおろし

封菊

おしゝ百満る座や茶のさ

宗味

幾時をこゝつゝや書のみ

古桃

は

煉の巻はつゝ影より

樓川



菊作<sub>レ</sub>筆<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ゆる<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>し  
名<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>の方<sub>レ</sub>南<sub>レ</sub>抄<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>代<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>自  
文<sub>レ</sub>綸 舉<sub>レ</sub>遠

曰

そ<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>木  
我<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>影<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub> 悔<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>山  
引<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>船<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>  
益<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>宿<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>旅<sub>レ</sub>麻<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>唱  
舟<sub>レ</sub>木 許<sub>レ</sub>人 斗<sub>レ</sub>實 純<sub>レ</sub>逸

曰

此<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>ち<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>とい<sub>レ</sub>つ<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>唐<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>落  
祇<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>餘<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>し  
文<sub>レ</sub>國

才<sub>レ</sub>牛

心<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>徳<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>浦<sub>レ</sub>水<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub> 青<sub>レ</sub>瓊

曰

桂<sub>レ</sub>男<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>あり<sub>レ</sub>宗<sub>レ</sub>祇<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>記 才<sub>レ</sub>牛

曰

傳<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>宗<sub>レ</sub>祇<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>鬚<sub>レ</sub>毎<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>香<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>薰  
有<sub>レ</sub>問<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>吾<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>鬚<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>香  
氣<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>馬<sub>レ</sub>尔<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>々

う<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>鬚<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub> 祇<sub>レ</sub>長



先業

紙の巻

果の句の証中二箇字先象  
とて書字の行の如く丹有  
記いつれも尾端の影も  
こゝろゝゝゝゝゝゝゝゝ  
平入かゝる書字の行の如く  
句と古かゝるもあはらざる  
その中修ねの力及つてあ  
なをこゝろゝゝゝゝゝゝ  
ろやの志うにあつて先  
水行の如くなる如く  
いかに名をあらわす  
先業の如く  
志うにあつて

一葉の老の如く世みやこ百年

南樓

山口紀

此一再名延徳の如く  
山口紀  
一葉の老の如く  
山口紀

いせの海やうや路は山口紀

半秋

碧種玉庵

自撰

この程もあゝぬんが 妹の州 汶光



題宗祇

老葉集引くことありしなり

丁啼く竹去ししや早雲も沾山

妻料より道付をたて山崎や百洲

さうさめいふ旅を悲しむ  
中にも成りし旅を尋ね  
比寸白より涙ありて  
限りの口は是れもあつても  
何れもよつあつてもあつても  
やまもあつてもあつてもあつても  
思ひやもあつてもあつてもあつても  
汝もあつてもあつてもあつても  
中より旅よりあつても

まゝぬき道ならぬ旅をやるもの  
おろしき旅を好まぬゆへ  
うき世のまゝ旅を果すも旅の  
まゝならぬゆへに旅の人よ  
二年の和縁のよき

まゝぬきやぬ抱人をもくさるるら  
常仙

日

帳を画く旅圖より馬を控の月  
湖十

あまのつらき旅のよき

追剥りよりあつてもあつても  
草紙月局庵



曰 時多成りは桂一田を新し  
とりの娘をとり合ふ  
初多は早苗を 一しう 同 新省 貢橋

曰 菊のよきよりそふ花やすみ衣 井調  
旅人はす白守や 路の山 <sup>八王子</sup> 大牛

曰 疑丹をひらくや菊はうは白ひ 白筍  
詠出も連歌も月はくさ子か 園香  
短冊は一葉いふや家は飯 十舎  
流しくは是も宗祇のやとりが 指兩

題宗祇

時多はおもひつとくかの  
月を~~~~~  
と一向は名を以てはら  
人ひりわ~~~~

二とくは月のほろしや 珠玉彦 宗瑞  
うはききありえ真も~~~~の 咫尺

曰

山名を勅方南抄りての流るる  
まゆりや二十九りて早流り  
素丸 珪琳



さあさあ田舎の夕浦の舟を何の  
西や船をささく船をささく  
といふ

舟も國を三保に帆しけ船 麦阿

古宗祇短典ひらた

享保十九甲寅仲殊

湖南亭輯之

題名月

名月や詠りぬ志の山さほら 一漁

新月の舟はくもさや船をささく 晋峨

物ほつこの衣はゆりさの月 超波

駒の蹄はささくささく船をささく 尾谷

名月や口ハおさくは広あし 半素

名月や湯縁は海さる隅田川 老嵐

同

名月や金費月波ささく 傘車

船母の船をささく船の月 長鶴



同  
さしりろの子とまきつてはるんが  
あふ坂乃月や現の海をさしり  
乱紫 百菴

同 十三歌

るるよ幣しき見あしり十三歌  
月あしり幣しきあしり十三歌  
十三歌我子の影を育みぬる  
安士 柯木 調柯

同

るるよ幣しき見あしり十三歌  
るるよ幣しき見あしり十三歌  
魚子 沾風

るるよ幣しき見あしり十三歌  
いつよりお母の影しりやうの月  
名月やあつらのねね梅より  
白主 樗山 瀾月 如簧

同 十三歌

一重しき梅もよけは十三夜  
るるよ幣しき見あしり十三歌  
大梅 竹良

同

名月や現の海をさしり  
華の影を数へんりあはる  
芳洲 拍翠











獨坐玄堂裏  
無言無後言  
深如人不知  
明月東窗照

無我啞と并りては  
寂の月 祇徳

曰

月ひと夜ひとし  
半分斤む

難信より此  
さ終りたり

伴丹

鬼貫

油

名月やうららかに  
寺の州

祇空居士

獨坐玄堂裏  
無言無後言  
深如人不知  
明月東窗照  
無我啞と并りては  
寂の月 祇徳  
曰  
月ひと夜ひとし  
半分斤む  
難信より此  
さ終りたり  
伴丹  
鬼貫  
油  
名月やうららかに  
寺の州  
祇空居士



此書は、  
張る事、  
門人、  
安藤子、  
跋

享保二十年春

芥澤彦七 彫

日本橋通二町目

東都書林

戸倉屋喜兵衛 梓



